

2012 年利尻山山岳年報

佐藤雅彦（北海道山のトイレを考える会利尻支部）

岡田伸也（株式会社トレイルワークス）

山本貴之（環境省稚内自然保護官事務所利尻事務室）

利尻山では、利尻山登山道等維持管理連絡協議会（以下、協議会）を中心として、様々な行政機関や民間団体、ボランティアなどが協働しながら、山岳環境の課題への対処を実施している。以下、筆者らが知りうる範囲内で、2012 年の利尻山の記録をここに書き留めておく。

なお、本報をまとめるにあたり、利尻山登山道等維持管理連絡協議会事務局、利尻富士町役場、利尻町役場、利尻島自然情報センター、稚内警察署駕泊駐在所、利尻富士町宿泊業組合などから、事業概要や統計データなどの情報提供をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

1. 利尻山の登山者数

ア. 年間登山者数

どれほど多くの人利尻山に登っているかについては、毎年、協議会がその合計人数を発表している（表 1-1）。集計作業のしやすさと、比較のための年度区切りの他の統計データがないことなどから、2011 年からは再び集計期間を「年」に戻すこととなった。このように本表で示された数値は、集計方法や集計期間が発表年により異なるため、単純に数値を比較することはできないので注意が必要である（集計方法の変化などについては佐藤（2010）を参照のこと）。

表 1-1. 協議会によって発表された利尻山の登山者数

年	和暦	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
	西暦	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
集計期間 ¹⁾		年	年	年	年	年	年	年度	年度	年	年
集計方法 ²⁾		登山者数	登山者数	登山者数	登山者数	登山者数	登山者数	入山者数	入山者数	入山者数	入山者数
人数		13242	11271	9746	9622	9765	10045	8906	6725	7047	7429

1) 年：1～12 月、年度：4～翌年3月。

2) 登山者数：登山者カウンター入下山両方向計測値÷2（6～10 月分）＋回収済み登山計画書によって把握できた人数（4～5 月、11～3 月分）、入山者数：登山者カウンター入山方向計測値（6～10 月分）＋回収済み登山計画書によって把握できた人数（4～5 月、11～3 月分）。

そこで、本報では 2003 年からの数値比較が可能となる表 1-2 を作成し続けてきた。本表は、夏季のカウンターによる数値と冬季の登山計画書に基づく数値の内訳を示すもので、2012 年の「全期間集計」の「登山者数」については、2011 年に対して 356.5 人（5％）の増加が見られた。また、集計期間は 6～10 月に限定されるが、近年使われている「入山者数」の両コースの合計値の年変化をみても、2009 年から 2010 年にかけておきた登山者の大きな減少傾向は回復しつつあるように見え、2011 年に対して 356 人（5％）の増加が見られた（図 1）。

表 1-2. 年別登山者数の変化（集計日：2013 年 2 月 10 日）

年		和暦	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
		西暦	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
カウンター (6-10 月)	入 山 者 数	駕泊	8458	9604	8244	8671	8733	9032	8007	6357	6683*	6766
		沓形	2177	1342	1120	909	920	970	817	323	312	585
		合計	10635	10946	9364	9580	9653	10002	8824	6680	6995	7351
	下 山 者 数	駕泊	8544	9850	8688	8715	8907	9022	8150	6378	6813*	6886
		沓形	1767	1145	923	773	782	841	662	262	265	497
		合計	10311	10995	9611	9488	9689	9863	8812	6640	7078	7383
	登 山 者 数	駕泊	8501	9727	8466	8693	8820	9027	8078.5	6367.5	6748	6826
		沓形	1972	1243.5	1021.5	841	851	905.5	739.5	292.5	288.5	541
		合計	10473	10970.5	9487.5	9534	9671	9932.5	8818	6660	7036.5	7367
登山計画書 (1-5, 11-12 月)	駕泊	1885	228	210	88	94	96	71	22	15	26	
	沓形	884	72	48	0	0	16	6	0	0	0	
	ほか	-	-	-	-	-	-	2	23	37	52	
	合計	2769	300	258	88	94	112	79	45	52	78	
全期間集計	登 山 者 数	駕泊	10386	9955	8676	8781	8,914	9123	8149.5	6389.5	6763	6852
		沓形	2856	1315.5	1069.5	841	851	921.5	745.5	292.5	288.5	541
		ほか	-	-	-	-	-	-	2	23	37	52
		合計	13242	11270.5	9745.5	9622	9765	10044.5	8897	6705	7088.5	7445

登山者数は従来の算出方法による。「入山者数」「下山者数」の定義のほか、推定方法などは佐藤（2010）を参照のこと。

*バッテリー切れによる欠測あり（10/5-31）

なお利尻山には、一般登山者以外にも登山道補修や遭難救助等の業務を目的とした登山者が存在する。そのうち登山道補修業務には、（１）環境省直轄整備事業に関わる業者、（２）グリーンワーカー事業を受託した協議会による整備関係者（山頂部の登山道補修等）、（３）環境省から登山道の維持管理業務を受託した業者（トイレブース清掃、駕泊ルート 9 合目以下の登山道の点検・軽微な修繕等）、などがあるが、このうち山麓部（森林限界以下）における登山道補修の作業員の往来については、登山とみなすにはあまりに近距離であること、近距離であり登山道に与えるインパクトが小さいこと、また人数が特定できること、などの理由により、カウンター計測数からの削除処理を行うことにした。そのため、表 1-2 のカウンター計測数からは、（３）の業務の内、山麓部（森林限界以下）の業務に当たるものを削除して掲載している。

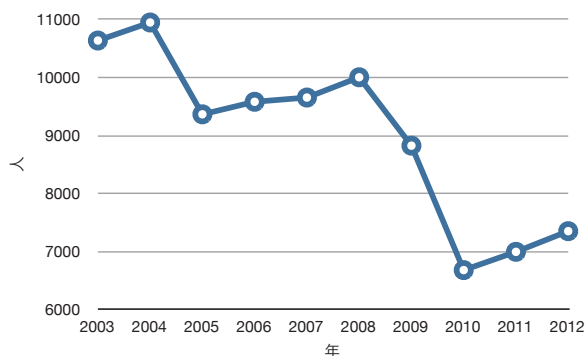


図 1. 入山者数の年変化.

イ. 月別登山者数

登山者カウンターによる計測数のうち、上り

方向の計測数を入山者数として月別にまとめた（表2、図2）。2010年以降、利尻山におけるツアー登山の数が減少したことから（表3）、それまでツアー登山最盛期だった6～7月上旬の入山者数が2009年と比較して大きく減り、2012年もその傾向が続いた。一方、8～10月は、2010年以降も入山者数に大きな変化は見られない。

表2. 2012年における6月から10月までの入山者数（集計日：2013年2月10日）

	6月	7月	8月	9月	10月
鷺泊ルート ¹⁾	1478	2548	1861	782	97
杓形ルート	- ²⁾	140	274 ³⁾	158 ³⁾	13
合計	1478 (1307)	2688 (2629)	2135 (2133)	940 (883)	110 (43)

合計の（）内の数値は2011年の値を示す。

1) 鷺泊ルート維持管理作業のうち森林限界以下での作業人数を削除済み。

2) 6月1日～7月5日まで欠測。

3) 環境省直轄登山道整備事業（2012年度は森林限界以上の杓形ルート7合目～三眺山間が施工対象地）を行う業者の作業人数を含む（8月：138人、9月：81人）

ウ. 登山利用の傾向の変化

2010年以降、ツアー登山が減少する一方で、登山者が個人単位で山岳ガイドを依頼する、いわゆる個人ガイド登山の増加傾向がみられる（表3）。利尻の地元山岳ガイドからの聞き取りによると、顧客は関東・関西など都市圏に住む人が多く、道内客は少ないとのことだった。ガイドを依頼する登山者の7割程度が最近山を始めた初心者であり、彼らはガイド料を支払って山に登ることに躊躇しない傾向が見られるという。顧客には女性が多いが、年代に差はあまり見られず、この点が中高年層が圧倒的に多いツアー登山とは異なる。残りの3割には、ツアー登山も時々利用して、全国の山に登っている非初心者が多いとのことである。

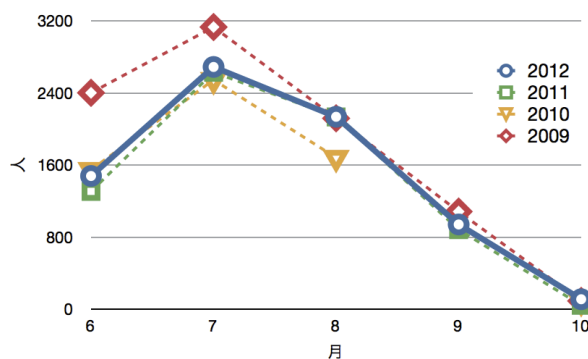


図2. 月別入山者数の変化.

ガイドを依頼しない登山者については、20～30代の若年層の登山者が近年目立つように感じられる。富士山や高尾山、丹沢などの首都圏の有名山岳地では5年位前からの傾向とされるが、利尻山においてその傾向が顕著になってきたのは、2010年頃からと思われる。しかし、このような若年層登山者の増加を裏付ける具体的なデータは、ほとんど把握されていないのが実情である。登山者の年齢を把握するのは、登山計画書の集計によるが、その提出は任意であり、仮に、中

表3. ツアー登山と個人ガイド登山のパーティ数およびパーティ人数の年変化

年	パーティ数				パーティ人数			
	2009	2010	2011	2012	2009	2010	2011	2012
ツアー登山	61	34	32	39	923	428	450	619
個人ガイド	13	31	36	23	51	150	146	107
合計	74	65	68	62	974	578	596	726

高年層に比べて若年層の方が計画書の提出率が低い場合、その正確な数を把握することは出来ないからである。しかし、それでも若年層あるいは若く見える登山者が目立ちはじめたと我々が感じる理由は、ツアー登山の激減によって中高年層の集団登山に以前ほど出会わなくなったこと、山スカートの流行のように登山ファッションの多様化とカラフル化が進んだことなどが影響しているのかもしれない。

上記の例のように、筆者らが利尻山の登山利用に質的な変化を感じはじめたのは、2010 年頃からである。ツアー登山の減少が目につきはじめた当初は、その理由として 2009 年 7 月に起きたトムラウシ山の遭難事故の影響によるツアー登山の敬遠が考えられた。しかし、理由はそれだけではなく、“ツアー登山で百名山を目指す”登山者がひと通り全山登頂を済ませたことによる百名山ツアーの自然減や、ガイドレシオの見直しによる 1 ツアーあたりの人数の減少、それに伴うツアーガイドの人員不足によるツアー催行可能本数の低下または企画の厳選化、大手旅行会社の集客方法の変更など、様々な要素が絡み合っているようである。かつて中高年の登山ブームが起こった 1990 年代に、リタイヤ世代達が百名山という目標を設定して登山を始めたのに対して、最近になって山登りを始めたばかりの登山者は、富士山や高尾山などの有名な山にまず登り、次にどの山に登るかを決める時に、必ずしも百名山などの肩書きにこだわらないという。達成感や満足感の指標が、以前の登山ブームとは異なっていることも、利尻山の登山者層に変化をもたらしているのかもしれない。

このような山岳地利用の質的变化を把握することは、山岳地の施設整備の手法や情報発信のあり方などを実態に合わせ、より有効なものにしていく上で重要な意味を持つと考えられる。例えば、利尻山の携帯トイレ普及活動初期には、当時、最盛期を迎えていたツアー登山による顧客への一斉周知と現地での利用指導が、普及に大きな役割を果たした実績がある。近年、使用済み携帯トイレの回収数が減少傾向にあるが、こうした利用形態や利用者層の変化は、これらのことにも無関係ではないと思われる。ツアーが周知してくれる機会が減ったことで、携帯トイレという情報に出会わずに利尻山に登る人が増えているのであれば、新しい登山者層の目に触れやすい場所への情報提示や、島内で携帯トイレを販売している宿泊施設などからの積極的なアピールが、携帯トイレ普及のためには新たに必要となろう。また、若年層は登山時間が短く、そもそもトイレの機会が減っている可能性もある。

利用の傾向は、年ごとに変化があるとは限らないが、山岳地管理の基礎情報として、できるだけ正確に各年の利用実態を記録しておきたい。利尻山では、登山計画書の記載内容について個人情報を除いてデータ処理することで、登山者の年齢、性別、在住地、ツアー・個人など所属別等を調べているが、他の山岳地との比較などは現実的に不可能な状態である。各地で統一した調査項目などを設定し、より広域的な北海道の山岳利用実態を把握できるシステムが将来構築されることが望まれる。

2. 携帯トイレ

ア. 販売数

携帯トイレ（サニタクリーン、(株) 総合サービス社製）の販売価格は島内では税込み 400 円で、

高密閉チャック×1、便袋×1が含まれている。販売は、島内各宿泊施設、商店、コンビニエンスストア、観光案内所、キャンプ場などで行われ、表4には利尻富士町および利尻町における販売結果を示した。販売数の減少傾向が近年は続いており、2012年も大きな増加へと転ずることはなかった。ただし、販売数の集計については、年によって販売数を確認できない施設があるなど集計データにばらつきがある。今後、正確なデータ収集や集計を取りまとめるシステムの確立も望まれる。

表4. 利尻島における携帯トイレ販売箇所別販売数（集計日：2013年2月10日）

年		2008	2009	2010	2011	2012
利尻富士町	宿泊施設	4748	3305	2305	1976	2063
	商店・コンビニ	20	350	820	210	350
	観光案内所	115	187	97	353	90
	キャンプ場	396	364	235	168	242
	小計	5279	4206	3457	2707	2745
利尻町		578	704	254	326	503
計		5857	4910	3711	3033	3248

イ. 携帯トイレの利用状況

携帯トイレは2000～2005年までは無料配布を行い、2006年度からは島内における販売が開始された。配布または販売実績と回収数などを表5に示した。回収数については2010年から大きな減少となり、ここ数年は約1300個前後の回収数となっている。登山者数に対する携帯トイレの回収数の割合はピーク時である2008年の約35%から、2012年では約17%と半減し、利用率が減少していることがうかがえる。ただし、登山者の観察などからは、ほとんどの登山者が携帯トイレを持参し、利用しているようにも見えた。今後登山者への聞き取り調査等による携帯トイレ利用の実態把握が望まれる。

使用済み携帯トイレをトイレブースや避難小屋に置き捨てていくケースが8件見られたが、例年とあまり変わらない数値である。使用済み携帯トイレの投げ捨てについては、2012年中に捨てられたと思われるものは、鴛泊9合目下部で見つけた1個のほか、2012年9月実施のトイレデーでは過去に捨てられたと思われる使用済み携帯トイレ7個と最近捨てられた1個が発見されている。登山者のマナー向上については今後も啓蒙普及活動を継続していくべきであろう。

表5. 携帯トイレの年別回収率（集計日：2013年2月10日）

年		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
配布数 ¹⁾		9517	9210	4946	5644	5857	4901	3711	3033	3248
回収数	両ルート合計	2545	2429	2396	2164	3541	2759	1377	1332	1287
	鴛泊ルート	2424	2376	2366	2118	3490	2711	1353	1316	1253
	杓形ルート	121	53	30	46	51	48	24	16	34
回収率		26.7	26.4	48.4	38.3	60.5	56.3	37.1	43.9	39.6

2007年までの数値は住吉（2009）に基づく。2008年は利尻町分を追加した新しい数値に訂正し、回収率も新たに計算した。

1) 2006年からは販売数

3. スtockキャップ

利尻島では、植生保全や登山道浸食の軽減などのために「利尻ルール」の一つとしてストックキャップの装着を呼びかけており、ストックキャップの販売も2007年から実施している。現在はシナノ社とブラックダイヤモンド社の2つの製品が並行して販売されており(215円)、シナノ社製品は、利尻町のすべての販売所と利尻富士町の公共施設(役場、キャンプ場2箇所、観光案内所)において購入が可能である。利尻町においてはここ2年間売り上げがなかったストックキャップの販売実績がみられた(表6)。このことは短期的な販売数の変化だけで早計な判断を下すのではなく、粘り強く長期的な視点から登山者の意識を変化させていくことの重要性を示唆している。なお、ストックキャップの装着率については、現在のところ全くデータはとられておらず、今後の大きな課題とも言える。

表6. スtockキャップ販売数(集計日:2013年2月10日)

年	2008	2009	2010	2011	2012
利尻町	22	12	0	0	11
利尻富士町	243	211	102	54	46
合計	265	223	102	54	57

4. 登山道における施設及び器機の設置状況

ア. 携帯トイレブース

設置場所など2009年からの変更はないが、いくつかの改善例や今後の課題を以下に記録しておく。

(1) 携帯トイレ使い方パネル(図3)

携帯トイレの使い方を解説するパネルが、8月に全トイレブース(6基)内に設置された。環境省の管理する5基のブースでは、内部壁面に木製パネルが設置され、利尻町が管理する杓形ルート避難小屋横のFRP製ブースでは、内部壁面にA3サイズのラミネート用紙で同内容のものが掲示された。これまでは、現地で使い方が分からずにまごまごしているケースも見られたが、このパネルで使いにくさによるストレスが解消されることを期待したい。また、木製パネルについては、手描きの可愛い解説図とともに、ブース毎に異なるメッセージが記されている。利尻登山の機会があれば、全てのトイレブースのドアを開いてパネルを巡り見るのも楽しいだろう。

(2) ブース内のカビ

杓形8.5合目ブース室内のカビが目立った。これは、ブルーシートによる冬囲いを外す時期が遅れ、ブース内に湿気がこもったことが原因と思われる。

(3) ブース内のハエ



図3. ブース内に掲示されたパネル。

鴛泊避難小屋横ブース2基の室内におけるハエの死骸は、2012年は週一回以上のペースで清掃が行われたため、それほど目立たなかった。しかし、例年より長く続いた残暑のため9月中旬頃までハエの死骸が見られた。

(4) ブースへの土砂流入防止

鴛泊6.5合目ブースにて、10月にドア前の水溜まりを解消する補修が行われた。2011年まで問題とされてきたドア前の土砂流入は2010～2011年に設置した土留め工によってほぼ無くなった。

イ. 気象観測機器

2007年から山頂付近に設置されていたが、機器の故障および設置許可の期限切れのため2012年7月に撤去された。撤去作業は、設置申請者の利尻山登山道等維持管理連絡協議会によって行われた。

ウ. カウンター

前年からの変更はなく、協議会により4か所にカウンターが設置されている。鴛泊登山口、杓形登山口、及び姫沼ポン山ルート(2か所)の合計4か所における各カウンターの設置期間(データ取得期間)は、6月1日から10月31日までの5ヶ月間である。

エ. 鴛泊北麓野営場(図4)

2011年に工事・整備が行われた鴛泊北麓野営場の利用は、2012年5月より新たに始まった。旧施設から変化があった以下の3点について記す。

(1) 使用済み携帯トイレ回収箱の減少

整備によって、登山口も2箇所あった携帯トイレの回収箱が1箇所に減った。

(2) インフォメーション機能の強化

キャンプ場の管理棟正面に、利尻山登山、姫沼ポン山トレッキングルートの総合案内板が設置された。地図には、標高とおおよその所要時間が表記され、利尻ルールなどの登山マナーについての解説や、危険箇所についての解説も掲示されている。これまでは登山の出発地点であるキャンプ場に、明確に現在地やトレッキングルートを示す地図がなかったが、この案内板の設置により、出発前のルート再確認が行いやすくなった。道迷いや無謀な登山の抑制につながるものと期待される。

(3) 施設の充実

車中泊スペースの整備やシャワー施設の整備、温水便座つきトイレの設置等によって、登山前後の宿泊がより快適になった。

5. 携帯トイレ募金(林野庁環境整備推進協力金)

2004年から鴛泊管理棟近くのトイレ正面に設置されている募金箱は、携帯トイレ無料配布時には購入資金の財源の一部としてその役割を果たしてきた。2006年からは、携帯トイレ有料化に伴



図4. 鴛泊北麓野営場。a, 全景；b, 管理棟（管理棟の前面には、総合案内板、携帯トイレ回収箱、登山計画書提出箱などの設備が並ぶ）；c, 登山前の外来植物防除のための靴洗い場；d, 下山後の靴洗い場。

い「利尻山環境整備募金」と名称を変更し、登山道、避難小屋、携帯トイレブースの清掃活動費として集められている。集められた協力金はすべて協議会に納入されている。募金額は表7に示す。

表7. 年別募金額

年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
募金額（5～10月）・円	116074	77688	17195	18626	23032	13599	7120	1681	10704

6. 利尻山登山道等維持管理連絡協議会

本協議会は、行政機関や観光、警察、自然団体など14の組織・団体により構成され、主に登山道の維持管理事業などが協議される場である。

【総会】

2012年6月26日に総会が開催され、平成23年度事業報告および収支決算報告、平成24年度事業計画（案）・収支計画（案）が協議された。

【環境省グリーンワーカー事業の受託業務】

利尻山山頂部登山道維持補修業務が、鴛泊ルート9合目～山頂（沓形ルート側合流点下部を含む）間で実施された。

【利尻山情報交換会】

利尻山に関連する民間も含めたメンバーから構成される本会は、「利尻山登山利用のあり方検

討会」(環境省主催) から生まれた山の情報交換の場である。総会(6月26日)終了後に事務局の呼びかけで開催され、10名が参加した。会では、2011年度登山利用統計の報告が行われたほか、登山道の維持管理・補修に関する意見交換などが行われた。

【その他】

このほか、両町による登山道の合同整備(9月7日)の調整なども行われている。なお、2011年に配置された専従職員枠は2012年にはなくなり、従来通りの事務局運営となった。

7. 環境省直轄整備事業

環境省によって、7～10月にかけて杓形ルートの登山道修復工事が実施された。登山道工事箇所は8合目から9合目付近までである。工事で使われる石材や木材などの資材はヘリコプターで空輸され、土壌浸食の進んだ登山道に、近自然工法による土留工などの整備が施された。修復工事の概要は環境省の以下のサイトで紹介されている。

http://hokkaido.env.go.jp/pre_2012/data/0713ab.pdf (2012年1月25日参照)

8. その他

ア. 全道一斉山のトイレデー

山のトイレを考える会利尻支部と利尻礼文サロベツパークボランティアの会により、「2012全道一斉山のトイレデー」(山のトイレを考える会主催)に参加する形で清掃登山が9月2日に実施された。12名の参加者が(1)北麓野営場～長官山と(2)杓形見返台～山頂～長官山の2つのグループに別れ、それぞれのルート上の清掃活動のほか、ティッシュ痕や携帯トイレの投げ捨て数のカウント、GPSによる地点の記録を行った。図5にはティッシュ痕(●)と投げ捨て(◎)の位置を示した。避難小屋から5合目付近までのティッシュ痕が顕著であり、携帯トイレ利用の更なる啓蒙活動のほか、トイレブースの追加などの対応が今後望まれる。

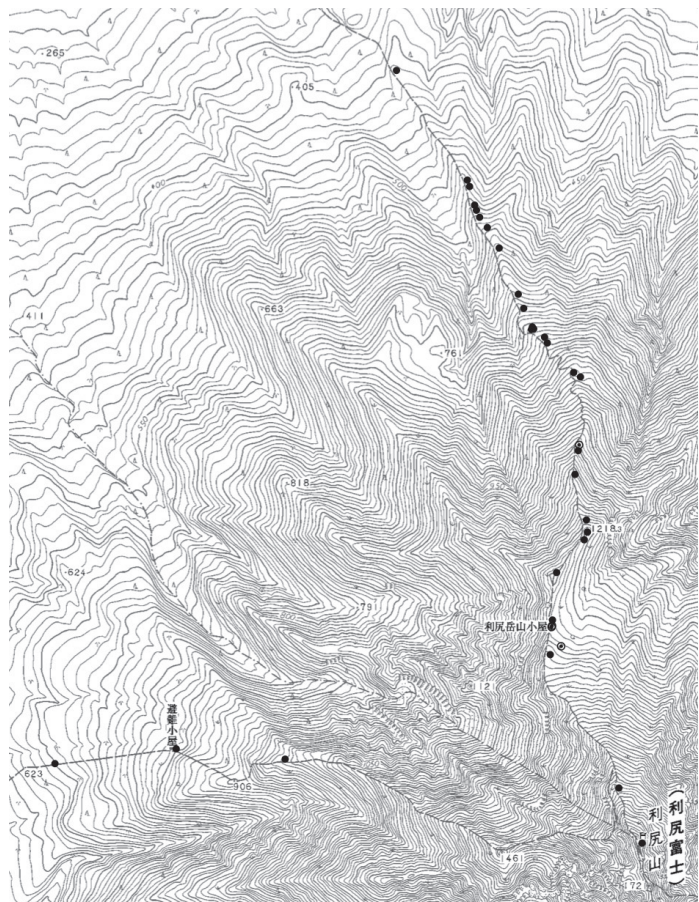


図5. ティッシュ痕と携帯トイレの投げ捨て箇所(調査日: 2012年9月2日)

イ. リシリヒナゲシ保全

自生種の保全対策として、DNA分析

により個体識別された近縁種の除去作業が7月22日に鴛泊ルート3か所で行われ、295株が除去された。作業は環境省グリーンワーカー事業を受託した利尻島自然情報センターが担当し、4名が作業にあたった。なお、一部の播種地では、除去開始（2009年）後から確認されていなかった栽培ヒナゲシの実生が確認され、完全な除去には相当な年数を要することが明らかになった。しかし、鴛泊ルートで行われた登山道整備による木柵階段や木柵土留等にしりしりヒナゲシの実生が確認される等の朗報もあった。

ウ. 事故・遭難

2012年における救助出動実績は6件である（表8）。例年、いわゆる中高年世代に要救助者が多いが、2012年も救助出動の対象者6人のうち5人が60歳以上だった。

救助を要した内容は様々であるが、例えば、7月2日（表8の2番）の水分不足等が原因と見られる疲労困憊は、夏期にはどの世代の登山者にも見られる。利尻山には水場がない上に、登山時間が長く、さらに森林限界が低く日射しを遮るものが少ないため、暑い日には水分不足を起こしやすい。若年世代は、多少の疲労も基礎体力で補えるため結果的に問題なく済んでしまうことも多いと思われるが、救助を要請するか否かは紙一重の差でしかない。環境省や地元観光協会のブログ等で発信している登山情報では、「利尻山には水場がないので、水を2リットル以上持つように」と記されており、注意を促している。利尻登山を計画されている方には、是非、現地か

表8. 2012年遭難救助出動実績

番号	月日	救助出動	通報時の態様	救助地点	年齢	性別	住所	パーティー人数	組織/未組織の区分	結果
1	6/16 (土)	稚内警察署沓形駐在所・鬼脇駐在所、利尻富士町山岳遭難救助隊	右足首脛骨・腓骨骨折	鴛泊ルート6.5合目	64	男	東京	11	組織（ツアー登山）	ヘリにより搬送
2	7/2 (金)	稚内警察署沓形駐在所・鬼脇駐在所、利尻富士町山岳遭難救助隊	疲労・脱水症状	鴛泊ルート4合目	64	男	愛知	単独	未組織	水分補給などにより自力下山
3	7/17 (火)	稚内警察署沓形駐在所・鬼脇駐在所、利尻町役場	崩壊地を横断中、恐怖で動けなくなった状態	沓形ルート9合目上部 (通称:親不知子不知)	60	女	神奈川	2	未組織（親子）	ヘリにより搬送
4	8/2 (木)	出動なし、電話対応のみ	同行者とはぐれて連絡不通	鴛泊市街地	68	女	千葉	2	未組織（夫婦）	自力下山（別ルートから下山していた女性を、登山口キャンプ場の管理人が市街地で発見）
5	8/6 (月)	稚内警察署沓形駐在所・鬼脇駐在所、利尻富士町山岳遭難救助隊	意識不明	鴛泊ルート9合目	72	男	埼玉	2	未組織（夫婦）	ヘリにより搬送後、病院で死亡を確認（病死）
6	8/14 (水)	稚内警察署沓形駐在所・鬼脇駐在所、利尻町役場	道迷い	沓形ルート9合目上部の登山道外（通称:親不知子不知）	27	男	北海道	単独	未組織	ヘリが出動したが、強風のため救助できず、翌日、地上からの救助隊とともに自力下山

※上記表は、稚内警察署鴛泊駐在所からの聞き取りによる。

ら発信される登山情報にも目を通しただけのよう願いたい。

また8月2日(表8の4番)の例は、夫婦が離れ離れに下山して、途中でひとりが下山ルートの間違い、登山口に停めた車に携帯電話を置き忘れてきたためお互いが音信不通になったという事例である。いくら待っても妻が下山して来ないため夫が警察に通報したが、この例では、携帯電話を持ってさえいれば、道を間違えても、すぐに連絡を取ることができ、救助要請に至らなかったはずである。利尻山の登山道は、分岐や藪道が少ないため、道迷いを起こすような場所自体が少ない。しかし、この例では、走るようなハイペースで下山していたため、数少ない分岐で標識の表記を見落としてしまったとのことである。夫婦はジョギングが趣味で、登山も標準タイムの半分程度のペースでいつも歩いているとのことだった。統計データから年齢だけを読み取ると、「体力の衰えた高齢者が起こす事故が多い」と考えがちだが、稀にこのような事例もある。

登山の心構えとして、自分の歩くルートをよく把握しておくこと、分岐では地図を見て現在地を確認すること、なるべく同行者と離れずに行動すること、携帯電話などの非常用連絡手段を必ず携帯し、バッテリーを浪費するような使い方をしないこと、などが年齢に拘わらず求められるだろう。利尻山は離島にあるため、救助に時間がかかる上に、人員的にも本土並みの救助体制を作るのは困難な面がある。いつもの登山以上に、入念な準備と慎重さを持って登山をして頂きたい。

エ. 山岳地管理専門業者の誕生

2012年5月に利尻島で設立された(株)トレイルワークスは、環境省や地元町が発注する登山道・携帯トイレブースの維持管理業務や登山道脇の植生復元業務などを請け負った。利尻山では、2011年まで多くの維持管理業務を協議会が担ってきたが、離島であるがゆえに現地作業に関わる人材の確保に苦労しており、島内での専門業者の誕生は、こういった地域の弱点を補完する存在として今後期待される。

オ. 利尻ルールの普及啓発

利尻ルールが提唱された2005年から8年が経ち、特に携帯トイレについては普及率日本一とも言われるようになった利尻山だが、ストックキャップの普及には、ここ数年の停滞感がある。「植物の上に座らない、踏み込まない」というマナーにいたっては、全く意識されていないケースも目立つのが実態である。

「利尻ルール」をご存じですか？

近年、各地の山岳地帯では登山者の増加により、し尿処理、登山道の侵食などが深刻な問題になっています。これは、最北の百名山に数えられる利尻山でも例外でなく、携帯トイレの普及活動や登山道整備に力を入れて問題に対応してきました。

しかし、離島であるが故の地理的条件、火山礫の量なる脆弱な土壌条件を克服することは容易ではありません。どんなに整備を進めても登山者一人ひとりが、自分の一歩が山へ与える影響について正しく理解し、自然環境に配慮した行動を取ることがなければ根本的な対策にはならないのです。

「出来ることから始める。」利尻ルールは利尻山のみならず、自然と人とのより良い関係づくりのための、はじめの一歩になるでしょう。



ルール1
携帯トイレを使うこと



ルール2
ストックにゴムキャップをつけること



ルール3
植物の上に座らない、踏み込まない！

携帯トイレ利用ガイド

登山の前に1
携帯トイレを購入しましょう。

- 携帯トイレ (携帯トイレケース1個・携帯トイレ1個) 1セット 400円
- 販売箇所 各宿泊施設、商店、コンビニエンスストア、町役場、観光案内所、キャンプ場(ゆへに、北麓野営場、森林公園)

登山の前に2
携帯トイレブースの場所を確認しましょう。

利尻山には携帯トイレブースが6箇所設置されています。

- 宿泊コース(6.5合目・避難小屋・9合目) ●寄形コース(避難小屋・8.5合目)
- 姫沼ボン山探勝路(中間地点) ※トイレトベーパーはありません。

下山したら
使用済みの携帯トイレは回収ボックスに捨ててください。

[回収ボックス設置箇所]

- 宿泊コース登山口(3合目) ●寄形コース登山口(5合目) ●探勝路口(姫沼側)

利尻山登山道等維持管理連絡協議会

図6. 新しく掲示された利尻ルールのポスター。

また、提唱を開始した当時に作成した利尻ルールของポスターも色褪せたり掲示されなくなったりしていた。そのため、2012年には、利尻ルールの普及ポスターが作り直され(図6)、登山者の主な入島経路であるフェリー船内やターミナル内の他、公共施設や宿泊施設等への再掲示が実施された。ルール提唱当時は、全国の山岳団体や旅行会社、山岳雑誌出版社などに手紙が出され、多方面に周知がされてきたが、近年はそれらの活動も弱まってきているように感じられる。今後は、対策の再検討を行うとともに、更なる普及活動を進めていく必要がある。

参考文献

- 住吉直人, 2009. 2008 利尻山のトイレ対策について. 山のトイレを考える会(編), 第10回山のトイレを考えるフォーラム資料集: 29-33. 山のトイレを考える会.
- 佐藤雅彦, 2010. 2009 年度利尻山山岳年報. 山のトイレを考える会(編), 第11回山のトイレを考えるフォーラム資料集: 73-81. 山のトイレを考える会.
- 佐藤雅彦・岡田伸也, 2011. 2010 年度利尻山山岳年報. 山のトイレを考える会(編), 第12回山のトイレを考えるフォーラム資料集: 37-46. 山のトイレを考える会.
- 佐藤雅彦・岡田伸也, 2012. 2011 年度利尻山山岳年報. 山のトイレを考える会(編), 第13回山のトイレを考えるフォーラム資料集: 19-28. 山のトイレを考える会.